

春日部福音自由教会 2020年6月7日 11:00 同時配信礼拝(ライブ配信礼拝)

聖書 新約聖書 マルコの福音書 7章14節～23節

説教「人を汚すもの」 小野信一牧師

おはようございます。今日はこの中央会堂に、先週と同じくらい 17、8 名の方が来られています。そして家に留まって礼拝している方がまだ多いと思いますが、今日から、丘の上会堂、そして庄和会堂にも少人数が集まっています。それぞれの場所で、共に、同時に、こうして礼拝をささげるといふようになりました。また一歩、少しですけれども“集まる礼拝”の再開に向けての一つのステップになっています。それぞれお互いが、なお気をつけながら、顔を合わせて会うことが出来ることを感謝しつつ、交わりを再開していきましょう。まだ家に留まっている方も、その日に備えていただきたいと思います。

今日はマルコの福音書が朗読されました。もう一度お祈りをささげて、み言葉に耳を傾けて参りましょう。ではお祈りを致します。

天にいらっしゃる私たちの父なる神様。変わる事のない真実なるあなたの御名を崇めます。今日、日曜日、週の初めの日を迎え、主イエス・キリストがよみがえられたこと、今日も生きておられることを覚え、また、聖霊が私たちに与えられて、教会を生まれさせ、教会を生かし、私たちを導いてくださることを覚えつつ、あなたの前に自分の体を携えて礼拝をささげます。今一人一人がそれぞれの場所でささげます、私たちのこの体とこの命をあなたが御受けくださり、礼拝者として迎え、祝福してください。み言葉が朗読されました。生ける神の言葉であるこの聖書の言葉によって、今日も、あなたご自身が御霊によってお語りください。主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン

I 「神の言葉」と「人の言い伝え」

皆さん、口から何が入るか、手で何に触れ、口から何が入って来るか、気をつけていることと思います。そういう日々がなお続いている中、今日はマルコの御言葉の続きに戻りました。受難節から復活祭を通して聖霊降臨日までは、いわゆる教会暦、教会のカレンダーによる説教でありました。今日の箇所は、2月の23日の説教、マルコの福音書7章1節から13節、「口と心」という説教題でしたが、その続きです。その連続の箇所です。いわゆる洗わない手で食べるという問題がそこにはありました。2月の後半でした。それから3ヶ月がもう過ぎました。この頃はですね、ここから2週間が大事ですよって言われていたので、2週間ぐらいたったら終わっているかな、とか思っていたのですが、それは私が間違っていたってことに後で気づきました。次の日曜日、3月1日から聖餐式を中止する、などの対策が始まりました。今日も聖餐式は行いません。しかし月の初めの日曜日です。心の中では、“主のからだと血”のことを、主の苦しみを覚えつつ、聖餐式を行わない礼拝を今日もささげています。

このマルコの福音書7章の御言葉は、人間の「言い伝え」と「神の言葉」、「人間の言い伝え」対「神の言葉」というこの対立の後半の部分です。より大事なものは何なのか、また人の心から何がでてくるか、という話です。

今日の説教題は、「人を汚すもの」としたのですが、もっと他にいい説教題があったかな、とも思いました。「人として何が大事なのか」とか、「人を人らしくするものは」とか、「あなたが人間らしく生きるとは」というような題でも良かったかもしれない、という風に思います。聖書には大事なことが書いてあります。そして、人間の社会、人間のコミュニティには、人間同士のルールとして大事なことがあります。大

事なことは色々あるんですが、しかしここで福音書を書いているマルコは記しています。イエス様は、「神の言葉」と「人間のガイドライン」、ここには、“言い伝え”って言葉があるんですけど、人間の伝承と言いますか、人が定めた言い伝え、あるいはガイドラインというようなものを、イエス様は区別しておられるということですね。神の言葉は神の言葉、人間の言い伝えは、人間のガイドラインだとして、区別をしている。

ユダヤ人にとって、手を洗ってから食べるということは大事でした。だから、「なぜあなた方は、なぜあなたのあの弟子たちは、手を洗わないで食べるんだ」という話が起ってくるわけです。それは大事なことだったのです。でもイエス様はもっと大事なことがあるんだ、ということをおっしゃられます。「外から入って、口から入って人を汚すものはないんだ」。食べ物などは口から入ります。それに伴って、例えばウイルスなども口から入ってくる。でもそれは“心”に入るものではない。19 節にそれは「人の心には入らず」とイエス様がおっしゃられます。心には入らずに、前の訳ですと、「厠に出されます」ですけど、「排泄されます」と言うんです。食べたものは、食べ物は排泄されることになっている。ウイルスが排泄されるかどうかそこはちょっとよく分かりません。ただ、食べたものは、心に入るのではなくて、腹に入り排泄される。だからそんなに大事なことはないんだ、というより、もっと大事なことがある。「大事なものは、人の心に入るものだ。そして、人の心から出てくるものだ」と、イエス様は話されました。それが今日の御言葉です。

Ⅱ 悟りなさい

さてもう一度、朗読されたところを振り返ってみたいと思います。14 節、「イエスは再び群衆を呼び寄せた」と書いてあります。イエス様は再びご自分のもとに呼び寄せるのです。群衆を、ご自分の言葉を聞く人たちを。この 7 週間の間、私たちはそれぞれバラバラになって礼拝をささげています。けれどイエス様は再び呼び寄せてくださいます。すぐにみんな集まって良いかは別ですけども、今、それぞれの場所でイエス様が呼んでいてくださる。“ご自分のもとに”と、ここに訳されてはいませんが、ご自分のもとに呼び寄せてくださる、という意味です。ご自分の言葉を聞く人たちを、主が再び呼び集めてくださる。私たちはバラバラになって、家で礼拝をしていました。毎週家で礼拝できたという人もいれば、お互いの顔が見えない中でそれが出来なかった人もいるでしょう。心が燃やされた人もいたでしょうし、心が燃えなくなってしまった、元気を失ってしまったという人もいるかもしれません。

でも、イエス様は再び呼び寄せるのです。そしてこう言われます。「皆、わたしに聞きなさい」、そして「悟りなさい」、「理解しなさい」。イエス様はそう言ってもう一度、再び、人々を呼び寄せたのです。私たちもイエス様の声を聞いて、「イエス様あなたのもとに参ります」と言って、集まれるとしても、集まれないとしても、イエス様のもとに、イエス様に聞くために、再び行きましょう。

イエス様は、「悟れ」と言われました。御言葉を悟るために、イエス様から聞いたことを悟るために心を開いてくださるのもイエス様です。14 節で「悟りなさい」と言われましたが、18 節では弟子たちだけになった時の会話の中で、イエス様はこう言われました。「あなた方までもそんなに悟らないのですか」これは「物分かりが悪いのですか」と訳されていますけれども、悟っていないという意味、悟るという言葉の反対語ですね。弟子たちもまた、中々悟らなかったというのです。それでイエス様は、群衆に話したことプラス、弟子たちには、イエスの近くに来て聞こうとする弟子たちには、もっと詳しく話して下さった。一度話したことをさらに解き明かして下さったということですね。それが 18 節から後の言葉というこ

とです。私たちも、イエス様からそのように繰り返し御言葉を聞かせていただきたいと思えます。

さて今、コロナウイルスに揺れるこの世界で、私たちには何が見えているでしょうか。この世界で起きている何が見えているでしょう。何が外から人の中に入っていくのでしょうか。私たちは食べ物を口から入れます。そして気が付かないうちにウイルスが入ってくることもある。口や鼻や目から入らないように気をつけながら今生活をしています。

また何が人の心から出てきているでしょうか。どんなものが、どんな思いが。良い思い、悪い思い。私たちは、どんなものが人の心から出て、人の行動に表れているかを見ているでしょうか。身近なところで、またテレビのニュースで。私たちは感染者の様子をニュースで見ます。聞きます。病院の様子、今ピンチだとか、そういう様子を見たり聞いたりします。心が痛む光景もあります。ブラジルの葬りの様子をテレビで映していました。ブラジルは土葬です。土に柩を埋めるんですね。私は一度だけ、その土葬の葬りに立ち会ったことがありましたが、その時は家族が集まり、土に穴を掘って、家族が手で土を掛ける、そして係の人が綺麗にする。その柩のそばには家族がいるのです。そしてそこには牧師や司祭がいて祈りをして葬るんですね。それが葬りの本来の姿です。でも、今度テレビで見たのは、広大な土地にいくつもの穴を掘って、次々と柩を入れて、そして、ブルドーザーで土を掛けていく、というものでした。防護服を着た人たちが、ロープで柩を引っ掛けて穴に入れて、ブルドーザーで土を掛ける。そのそばには家族もいません。そのそばには祈りをする牧師や司祭のような人も見えませんでした。そのような葬りの様子を私たちは見えています。人と人の接触を減らす努力をしています。私たちもそうします。それは感染対策として有効です。でも人と接触しないと、人間として寂しいんですね。その両面があります。今日久しぶりにこの礼拝堂でお顔を見るのが出来た方もあります。顔を見れて嬉しく思います。でも、人が集まり増えるとまた感染のリスクが少し上がる。ですから、その感染対策と、人として求める交わり、その二つの相反する要素を両方見て、よく考えて、上手にバランスを取らなければなりません。そういう努力を個人としても、また社会としてもしていると思えます。学校も、また会社も、また飲食店も、どうやって人が集まったらよいか、どうやって感染を防ぐか、その両方のバランスを取る。教会もそれに気をつけながら進まなければならないと思えます。

Ⅲ 命を守る

今南米で、波が大きな波が来ているように思われる。この後もしかしたらアフリカなど、より医療や公衆衛生の体制が不十分な国で、地域で、感染が拡がることになるかもしれない。そうなったら心配です。“衛生”って言葉は英語では Hygiene(ハイジーン)、ドイツ語で Hygiene(ヒュギエーネ)って言うらしいのですけれども、これは聖書の言葉、聖書に出てくる言葉をもとにしていると思えます。それは「健全」とか「正しい根拠がある」、これは「教え」ですね。「健全な教え」って聖書に出てきますね。健康である、欠けがない、ってことです。ヨハネの 5 章に何度もこの言葉が出てきます。ヨハネの 5 章 6 節「良くなりたいか」とイエス様は尋ねます。「すぐにその人は治って」(9 節)、とか「私を治して下さった方」(11 節)、私を健康にしてくださった方、また、「見なさい。あなたは良くなった」(14 節)とイエス様は言われました。これらはみな、この「健全」「健康」という言葉、「ヒュギエース」という言葉が使われています。日本語ではそれが「衛生」、「生をまもる」、「命を守る」という言葉で、明治時代に訳されるようになったそうです。健康を守る、病気の予防、清潔を保つということですね。自分の命を守るために手を洗う。パンを食べる前に手を洗う、消毒する。これは自分の命を守ることです。自分の感染を防ぐ

ことです。

一方、“公衆衛生”って言葉もありますね。これはみんなの命を守る、自分だけじゃなくて、社会の、お互いの、みんなの命を守るってことだそうです。マスクをするのは、自分の命を守るためにはあまり、そんなに効果がないと言われてはいますが、でもみんなの命を守る、公衆衛生のためにそれをすると言われてはいます。会堂に集まり始める時に、自分の衛生、そしてお互いのための公衆衛生に、なお気をつけながら集まっていきましょう。

IV 人を汚すもの——人の心から出てくるもの

人の心から何がでてくるか、という問題がここに 있습니다。イエス様が言われた言葉、21 節以降のところにそのリストのようにして書かれていますね。何が見えるのか。この世界を今見て、私たちには何が見えるでしょうか。例えば警官の暴力という事件が起こっています。アメリカで大きな事件になっています。日本でもそういうことが、同じようなことが起こり得ます。アメリカでは、人種差別の問題と結びついて、大きな問題になります。日本にも差別という問題があります。根深いものがあるでしょう。アメリカでは選挙もかかわってくると言われ、教会や聖書を利用しているという批判もあります。そのことがきっかけで、警官による暴力がきっかけで、暴動となり暴徒化する。略奪、破壊ということが起こっている。人と人、人種と人種、あるいは考え方の違うグループ同士の対立、ののしり合い、また手を出す殴り合い、互いに非難する、また見下す、暴言を吐く。そういうことが世界のいろんなところで起こったり、あるいは、会社や家族の中で起こったり、そういうこともあるでしょう。

人の心から何が出てくるか、という問題がそこにあります。いろんな問題が起こる。そうすると、犯人探しを始めたり、誰かを悪者にしてつるし上げたりする。最近インターネットでの誹謗中傷などによって、人の命が失われるという事態があったと聞きました。なぜそういうことが起こったんだろうと思います。匿名による攻撃というものが、ネットの上であるんですね。なぜ人は攻撃するんでしょうか。攻撃する人も、何か怒りを抱えているからでしょうか。自分の顔や名前を出さずに、怒りをぶつける場があるときに、もしかしたら、人間の怒りとか、悪い感情、悪感情が出過ぎてしまうんじゃないか、と思います。

イエス様は、21 節で、「人の心の中から悪い考えが出て来ます。」と言われました。どんな悪い思い、考えが出てくるのか。例えば、「淫らな行い」、「盗み」、殺意あるいは「殺人」、「姦淫」、「貪欲」、人のものを我がものとして奪い取ろうとする。人のもの、誰かが持っているもの、その権利、あるいは性的な対象として、自分のものとして奪い取ろうとする「悪行」、「欺き」だまし取ろうとする。「好色」、さらに「ねたみ」、「ののしり」、「高慢」、「愚かさ」。人の心からはそういうものが出てくると、イエス様は言われました。「悪はみな、内側から出て人を汚すのです」。人の内側から出てくるものが人を汚すのだとイエス様は言われました。「外から人に入ってくるどんなものも、人を汚すことは出来ません」「人の心から出てくるものそれが人を汚すのです」と、イエス様はそのように言われました。

この場合の“人”って何でしょう、ということを考えさせられます。人の心から悪いものが出てくる。ちょっといくつか、全部ではありませんけど、いくつか振り返ってみましょう。例えば「ののしり」ってものがある。“そしり”とか“悪口”と訳されている聖書もあります。人の心に「怒り」があって、それが攻撃に代わるとき、それを「ののしり」というのかもしれない。「ののしり」という悪いものが、人間から出てくる。その前には「怒り」が、心の中にあるのかもしれない。そして、怒りの前には、もしかしたら、その人の心の中に傷があるのかもしれない。悲しみがあって、何かその人に悲しみがあ、傷があ、それで怒

っている。悲しみは、傷から怒りとなり、それが攻撃に変わる。「ののしり」そして「悪口」になる。特に匿名の場とかで、それが爆発するというようなことが起こる。顔とかを合わせて言い合ったら、もっとエスカレートしたり、暴力になったりするということもあるでしょう。「悪行」と書いてある言葉は、“悪意”と訳している聖書もあります。「殺人」という言葉を“殺意”と訳している聖書もあります。“悪意”や“殺意”が「悪行」、「殺人」に変わっていく。これらの悪い思いが、人を汚すというのです。

どういことでしょうか。人間というのは、神のかたちに造られた者です。神様に似せて造られ、人格を持っていて、神様が呼ばれたら応える、応答する存在として造られています。神と向き合い、人と向き合うように、そもそも造られているその神のかたちの人間を、これらの悪い思いが汚す、損なうということでしょう。

神と人に向き合うべき人間を、その本来あるべき姿から遠ざけてしまう。神の前に立てるはずなのに、人と人は向き合うことが出来るはずなのに、それが出来ないように、人と人とを離れさせたり反目させたりする。そういう悪い思いが人の中から出てくる。それらは外から口に入るのではなくて、人の心から出てくるんだっていうのです。

私たちは、怒りとか悲しみにどう立ち向かったらいいのでしょうか。悲しみや傷にどう向き合うのかを考えさせられます。イエス様も悲しみを知っていた人でした。悲しみを持った人でしたよね。イエス様も傷ついたことがあるし、傷を持っていた人でした。でもイエス様はそれを怒りに変えて、怒りをもって誰かを攻撃するという事はされませんでした。

ウイルスは本来、人の人格を損なったり、傷つけるものではないはずですが、病気やウイルスは、人格を傷つけませんが、一方、怒りとか攻撃とか、ののしり、暴力、ねたみ、そういうものは、人格を損なわせます。私たちはたとえ悲しみがあっても、病があつたとしても、傷があつたとしても、自分の人格を損なうことなく、損なわせることなく、生きることが出来るはずですが、イエスは言われます。「外から入るものを恐れ過ぎるな」。「それは神のかたちとしてのあなたを傷つけるものじゃない」と。

内から出るものに気を付けよと、イエス様は言われます。悪い思いが出てくると、それがあなたの人間性、神のかたちの人格を傷つけることになるのです。

V 真に恐れるべきは

一つ御言葉をお読みしたいと思います。ルカの福音書 12 章 4 節。今日は交読文でマタイ 10 章を読みましたが、それと並行した箇所です。イエス様はこう言われました。「わたしの友であるあなたがたに言います。からだを殺してもその後はもう何もできない者たちを恐れてはいけません」。からだを殺してもそれ以上何も出来ない者を恐れるな、体を殺してもたましいを殺せない者たちを恐れるなど、イエス様は言われたのです。食べ物や病気やウイルスは、人のからだを健康にしたり病気にしたりすることが出来ますが、人のたましいを汚すことは出来ません。病気やウイルスはたましいを殺せないのです。からだを殺してもそれ以上何もできない人間や病気やウイルスを、私たちは恐れてはいけません。

むしろ人のたましいを生かすものに目を向けるべきです。私たち人間のたましいを生かす方を恐れるべきなのです。たましいを汚させないように、そして恐れや怒りに自分を支配させないようにしましょう。口から入るものは大事です。食べ物は私たちを養います。ウイルスは私たちを病気にし、あるいは殺します。ですから気をつけなければならない。大事にしなければなりません。しかし、からだを殺してもそれ以上は何もできないのです。

何を真に恐れるべきか、誰を心から恐れるべきか、間違っはなりません。“人の心”に入るもの、それは何でしょう。食べ物やウイルスではありません。“神の言葉”が、人の心に入ります。

VI 御霊に満たされる

神さまの優しさが、あるいは人の優しさが心に沁み入ってくることがあるでしょう。心から出るものとは何でしょう。「憎しみ」、「憤り」、「ののしり」、「悪意」です。その反対は何でしょう。何が心から出てくればいいのでしょうか。聖霊が私たちに与えられた時に、私たちに与えられるものです。「愛、喜び、平安」。それがもし私たちの心から出てくるならば、それは、人のたましいを汚すのではなく、人のたましいを清め、癒すことが出来るでしょう。「愛」、「喜び」、「平安」、「寛容」、「親切」、「善意」、「誠実」、「柔和」、「自制」。私たちは御霊に満たされましょう。御霊が流れるように、自分の心を神に向けて開きましょう。御霊が私の内に流れて、“御霊の実”を与えてくださるように、心を開きましょう。そして、神に向けてだけでなく、人に向けて心を開きましょう。自分を通して、御霊の実が流れ出ていくように、「愛、喜び、平安」が流れ出て行くように、自分の心を人に向けて開きましょう。私たちはもしかしたら、自分という“壁”を持っているかもしれません。自分という壁をもって、自分を守っているってこともありますよね。ある意味で大事なことでしょ。でも自分という壁に穴をあけられるでしょうか。それは御霊の風が吹き込む穴です。その通気口のような穴を神様に向かって開きましょう。自分という壁に穴を開けて神様に向けて開きましょう。そこから御霊が流れてきて、御霊が届けてくださる「愛、喜び、平安」を頂きましょう。そして、もう一方にも穴を開けて、人に向かって心を開き、「愛、喜び、平安」が流れ出るようにしていきます。

憎しみをぶつける人がいます。人を見下す人がいます。差別が起こる。攻撃や暴力が起こってしまう。それらが渦巻く世界の中で、日本で、妬みや憤りやそしりが私たちの心から出ないようにするにはどうしたらいいか。私たちは、いい人間になりましょうというのではなくて、御霊に満たしていただきましょう。そして、愛や喜びや平安が流れて行くように、神の言葉を心に入れて蓄えましょう。神の愛を受け、神様と人の優しさを味わい、感謝しましょう。

お祈りをささげましょう。

天の父なる神様。私たちの心をあなたの愛と恵みによって満たしてください。あなたが愛と喜びと平安をお与えください。そして何のものにも自分のたましいを汚されることのないようにお守りください。そして自分の口や自分の心から出てくるもので、自分や他の人のたましいを汚すことのないようにお守りください。主イエス・キリストの御名によってお祈ります。 アーメン